

令和元年度 第1回 南砺幸せなまちづくり創生総合戦略推進委員会  
議事要旨

開催日時：令和元年9月2日（月） 14時00分～16時00分

開催場所：南砺市役所福野庁舎 2階講堂

出席委員：9名 吉澤委員長、松本副委員長、北清委員、高野委員、谷委員、  
大村委員、石田委員、中野委員、上坂委員  
（欠席委員：1名 平子委員）

戦略本部：12名 市長、副市長、教育長、市長政策部長、市長政策部担当部長、  
市民協働部長、市民協働部担当部長、ブランド戦略部長、ふる  
さと整備部長、教育部長、地域包括医療ケア部長、地域包括医  
療ケア部担当部長

議事

（7 協議事項、8 報告事項について資料に基づき事務局より説明）

○ 南砺市はとても住みやすくて、保育園も充実しており、すごく質の高い教育をさせていただいている点には本当に感謝している。産んでしまったら、とても良い所なのだろうと思うが、結婚しない人が多いという問題は肌で感じている。結婚を意識するのが30、40の焦る時期ではなく、20代前半とかから、感じる機会を増やせていければよいのではないか。出産について、市内に産科がないというのはひっかかっている。小児科の数も少なく、砺波など市外に出るとい事が結構あるので、対策されているのはわかるが、そこが少しひっかかる場所。出産・子育てと就労ということについても、企業が応援するという事を耳にする機会も増えたが、実際子どもが何かあった時に、どこまで対策してくれているのか不安がある。全国どこも人が少なく、企業もぎりぎりという状況の中で、子育てのために人に迷惑をかけてまで働きたくないという思いもあり、良くなって欲しい。

○ 武蔵野市で田舎食堂をやった際、参加者の皆さんに関係人口になっていただくことができた。そこで「あ、南砺に友だちがいるんだ」という感覚をもってもらい、来やすい場所になったな、と思ってもらう所から移住に繋がっていくのではないかと感じたので、このような草の根運動を続けていく事が今後の人口減少の歯止めに繋がるのではないかなと思う。民芸協会主催のイベントに参加させていただいて、民芸に興味をもつ若い世代が増えていることを感じた。南砺市は土徳という素晴らしいものを持っているので、そこ

を通じた人口交流をし、南砺市の良さを伝えていけたら、ながらそこに住みたいという気持ち、しかも民芸や土徳という根本的な良さを分かっている人達に住んでもらえるのではないか。古民家を買ってそこをリノベして住んでいるが、今後、子どもを産んだりする時には、産婦人科が近くにあったり、自宅で産めるような産婆さんがもう少し増えていただけたら、若い人ももっと来やすくなるのではないか。今は福光に住んでいるが、福光高校が廃校になってしまうことに危機感を感じていて、学ぶ場所が少なくなってしまうという事は、小学校から大学までここで過ごす大切な時間が奪われてしまうと思う。小さくても良いので学ぶ場所づくりができれば良いのかなと感じています。もちろん、若いころに東京なり、首都圏に放流して、英知を養ってまた戻ってくるような環境作りもできれば良いのではないかと感じています。

○ 結婚しないのも、それほど理由も無くしていない人もいれば、頑として意思をもってそのようなライフスタイルの人もいれば、だと思いが、今人口が減っている、転出しているといった色々な問題があるとすれば、それは人口の問題に尽きるのだらうと思っています。結婚して出産する人が増えない事には何も始まらず何も解決しないのかなと思っています。ただ、移住してこられる方はエネルギーとか考えを持っているので情報も能動的に取りに行かれるのですが、ぼーっと暮らしやすい、良い意味で悪い刺激が無い所なので、何も耳にしなくてもそれなりの生活がしていけるところで、実はこんな取り組みをしているんだ、市はこんな支援をしているんだ、ということをも市民のどれくらいの方がご存じなのかと思う事があります。行政情報を発信する中で、私も広報を読んでいるにも関わらずまだまだ知らない事が多い気がしていて、そういうのをもっと周知する、広報する、さらに広まる浸透するようなことがあれば、ぼーっと生きている人にももっと色々な刺激が突き刺さってくるのかなと思いますので、もっと「住みやすい市だな」と感じることにつながるのではないかと思います。

○ 前にも、本当にこの総合戦略というのは市民に広まっているのか、というのは注意をしてアピールに繋げて下さいということをおっしゃっていただきました。やはり多様なライフスタイルがあって、それを受け入れるまちづくりこそが、持続可能なまちになっていくのでしょし、それを支えていくような空間づくりも必要なのでしょうけど、行政が大きな存在を示す南砺であれば、そのような取り組みをもっと発信していくということが重要なのかなと思いました。

○ 地域づくり協議会として取り組んでいるようなことを始めていく所です。生まれも育ちも地元でして、移住された方の話を新鮮な気持ちで聞いていました。住み続けたいというような指数の話もでたものですから、これは質問なのですが、転入が上がっている、転出が下がっているという事ですが、住み続けたいと思う市民が減っている、この関連はどのように理解すればよいのでしょうか。市民アンケートの数字なので、あんまり、という話もあるかもしれませんが、転入が増えている、転出が減っているは今後期待できる事ではありますが、一過性の事であればストップしてしまう危険もあるかと思えます。その辺の分析は細かくしているのでしょうか。大変必要なことだと思っています。

▲ 転入が上がっているという所はありますが、市民アンケートは市民が対象ですので、どうして転入したかなどは聞けないのは、残念というか、本当は聞きたいところです。資料4の中で理由を聞いているのですが、なぜ南砺市に転入してきましたか、なぜ転出されるのですか、というのは分析できますので、これにつきましては9月末が過ぎまして人数が確定しましたら改めてお伝えできると思います。アンケート調査につきましては、年代毎、地域毎にお聞きしておりますので、どういう年代のどの地域の人がという傾向は分析しております。ただ無作為抽出ですので、転入された方が必ずしも対象になるとは限りません。

○ なるほど、悉皆ではないわけね。転入者の分析は、年齢などはわかるのでしょうか。確か総務省か、内閣府の分析で、過疎地域の移住者の分析をやっていて、全体として都市部から過疎地域に移住するのは絶対数としては減っているのですが、各過疎地でみると割合は増えている。また、20代30代の女性の比率も増えている。というのが、地域ごとに分析したものがあつたのですが、それを踏まえた上で、ここに住み続けたいという意識をどのように醸成するか、その辺はまた考えていただければと思いますし、移住された方々がより暮らしやすい、結婚するタイミングというか機会で、産まない人結婚市内人に施策を考えないといけないなとおっしゃいましたけど、具体的に考えていらっしゃることはあるのでしょうか。

▲ 今言われた事が大きな課題。言い訳が一つと思っている事を一つ言わせていただきます。

計画を決めた時のスケジュールというのが、今後どういう形でプラスになるか、マイナスになるかを見極めるのが、今の段階になつてもよくわからない所

があります。ただ、東京の調査などをみると、間違いなく興味は向いている、興味は向いているのだけれど実数で言うと、地方の取りあいの中で、どれだけ人数が出るかというのはこれからもやっていかなければいけない。それともう一つ総務省、厚生労働省、内閣府がこの計画を3年目に修正している。若い人たちの希望出生率が1.6、そして2.09が人口を増やす時に出生率のベースですよというのを発表したのですが、若い人が減っているので出生率があがっていかないと人口は増えない。だから南砺市は駄目なんだという事ではないのですが、データではそういうことがあった。

全ての人達のライフスタイルを重視して、一人一人を大切にすまちなちというのがすごく大事だと思っていまして、子どもを産みたい人、産みたくない人、結婚したい人、したくない人、老若男女全ての多様性のある人が、如何にこの地域を好きになって、保育だったり教育だったり地域の活動が魅力的になっていくことによって、よりクローズアップして都会からも見えてくるのではないかと思っていまして。

県の委員になった時に、産めや育てやそういったことしか出てこなくて非常にショックで。県にいくと女性の委員の人の方が意見が合うんですね。意見としてそういうことを言っても必ず2.09ということになってしまう。だから南砺市も同じようにスケジュールを引いていて、それが高い低いという話になっているのですが、後々に向かってじわっと上がっていくような今後、2期目の総合戦略に必要ではないかなと思っています。その中には保育とか、病児保育とか、発達支援のサポートだとか、もちろん義務教育と子育ての切れ目ない支援だとか、そういったことをすべて盛り込んでいくという覚悟をもっていますが、参考までに富山でみてきたまちなち診療所には色々な科があるのですが、病児保育と産後ケア支援室とかああいうものが今後大事なんだろうなと思っています。ただ、一番大事なのは何と聞くと「産婦人科でしょ」と言われるのですが、今の世の中をこうしたのも我々、今病院の中で産婦人科医を呼んで来れないのも我々、というような内面的なものがあります。これをクリアするには例えば医学部に入ったら半分は産婦人科になりなさい、というような法律がないと増えない、本当に増えないんです、これが頭の痛い話で、家で生まれる方が増えてきたりするので、色々な選択ができるということも今後考えていかないとなりません。公立に産婦人科をドーンと建てるとするのは難しいので、選択肢を増やすという事が今後大事なかなと思いました。

- ライフスタイルが変わってきた、昔の知恵を活かしながら、というところで、多様な仕方が必要。ただ何かネックで産めないということはサポートしていかないといけない。産婆さんをどう育成するか、大事なかなと思いまし

た。

- 若者女性の就業率、就業数、大変良い数字が出ており評価も良いですが、背景には有効求人倍率とか景気の動向とかがあって、失業者があまりでないようになってきていると思います。ただ103万円で切っているのはなるべくフルタイムが良いのだろうなと思うところがあるのですが、我々も照会をさせていただく中で、色々な家庭の事情とか体力的な事情とか病気とかなかなかフルタイムで働きたいけど働けない、それを希望する方はたくさんいらっしゃる。ただ、そこも含めて上がっているんだろうとは思いますが。求人倍率が高くて、国の方では働き方改革、女性、高齢者がどんな形でもいいので労働参加して欲しいという方向性をもっていますので、企業の方でも正社員1人でやる仕事を3人でやってみたりと、その人人に合わせて就業環境を整えていくという流れが見えるようになってきました。

転出者の理由の職業上の所が多く出ているので、中身がよくわからないのですが、そうなのでしょうね、というところです。

それと去年の資料ですが「東京圏に転入した若者の働き方に関する意識調査」を見させていただきましたが、2015年ちょっと古いですが、男性の方は給与水準とか自分の関心のある仕事に就きたい、女性の方はとりあえず都会に出たいですとか、育児介護の制度が充実している企業に勤めたい。一方で地方の暮らしのイメージは長く勤められる、通勤の時間が短い、転勤がない、何かあった時に頼れる知り合いがいる、というのがああるそうです。もう一つ、どのような環境が整ったら地元に戻って就職しますか、というところで、配偶者の仕事が確保できるだとか、住みやすいの2点が挙げられている。一方、自分の友人の息子で、一旦東京で就職したが、就職が合わないのか都会があわないのか、30前にこちらで就職した、社会人枠に合格したという話をポンポンと2つききました。よく考えると私の兄も東京行って大学出て帰ってきた。なんでだと聞くと「都会が合わない」と。このまま将来的にずっと都会で働いていく自信がなくなった、というのがその当時の理由だったと思います。地方の暮らしのイメージ、知り合いがいるとか、本物、働き方といったところが変わってくるのかなと。転職するというイメージが、昔ほど悪い事では無くなってきたのかなと。もう少し、先ほど出した例も含めて、地方のイメージというものを上手く発信していければ良いのかなと感じました。

- 私は南砺に来てからまだ2か月、前任が東京の浅草におりました。富山県民なのでなじみはあるのですが、東京の浅草にいましたが、東京にずっと働きたいとは思わなかった。上野の方にもおりましたけども、満員電車ですと

かギスギスしたのが嫌で、20数年ぶりによく富山に戻ってこられた。それで来て2カ月ですが、南砺の魅力は色々と発信しておられると思いますが、まだ伝わってこない。もっともっと色々と良いものがあるのですから、もっと発信してはどうかと思います。

色んな指標等、内部評価等出しておられますが、効果の前提となる目標数値は正しいのか、他の地公体と比べてどうなのか、評価高すぎないか低すぎないか、という気はしました。社会的な流れ的には無理があることもあるかと思いますが、例えば隣のまちとか地公体ができているのに、ここが出来ていないという事があればどうなのかな、と思いました。

- 経済団体ということがありますので、その観点からお話します。基本的には南砺市の施策、特に商工施策は他の自治体と比べると大変充実していると思います。もっと市民の皆さんが使い勝手の良さをわかっておられないのかなと思っております。先ほど南砺ブランドの話もでておりましたが、この間も販売戦略会議がございまして、なかなかブランドというのは1日にしてなるものではないので、繰り返し積み重ねだと思っております。これから中身を、きちんと行政側や関係各位と連携をしながら、この南砺ブランドを経済の好循環を生み出すようなものにしていければいいのかなと思っております。

先ほど地域雇用者数の話もでておりました。これも個々の企業もそうなのですが、市の方も色んな公共施設を安く使える、スキー場もある、テニスコートもある、プールもある、色んな施設があります。使い勝手も良いですし、私はモニタリングもさせていただいているのですが、金沢からも良く来ていただいているんですね。金沢からだとは交通の便利さもあると思うのですが、やはり使い勝手が良い、あるいは施設が空いている、スタッフが親切であるとか、単なる交通の利便性だけで利用されている訳ではないと思うので、アフターファイブの充実なども、企業が雇用するという点では利点になるかなと思っております。

伝統的工芸職人の数字もみておりました。これはやはり地域資源の宝庫でありますし、市として大事な地域資源をどう守っていくか育成していくかというのは大きな課題だと思いますし、力を入れていただきたい。

それともう1点、公共交通を使いやすいと感じている市民の割合という指標が、市営バス巡回してもらっているが、買い物に利便性のあるような施設を停留所に入れてもらえると、買い物の利便性向上にも繋がりますし、いつもまでも自分でハンドルを握れるとは限りませんので、買い物の利便性も考えた停留所の設置を考えていただければいいのかなと思います。

商工会としても、しっかり連携をして取り組んでいきたい課題も多いですので、持続的発展に繋げていきたいと思っておりまして、これは市と同じ思いだ

と思っております。

- 今、東京の企業で働き方改革のプロジェクトを立ち上げていると、ラッシュアワーに巻き込まれて通うのは嫌だ、離れた場所で働きたい、子どもを企業内で保育所等を作ろうというのがありますが、それも最適解ではなくて、子どもを連れてくるだけでも疲弊しますので、やはりサテライトオフィスやテレワークということになると、職住が接近しているような場所がサテライトオフィスとしてありうる世界です。そうなったときに色々な情報は南砺市も既に整備されていますので、例えばリバープロジェクトがサテライトオフィスにするとかですね、ができてくると、その中で子育ての人達も子どもをあやしながら従事できるということで、多様な働き方が生まれてくると思います。そのことは地域にとって見るとチャンスだなと思っておりますので、そういったところでご意見いただければいいのかなと思います。副委員長の松本さんは今地域づくり協議会の会長ということで色々立ち上げをやっていて、様々に受け止めていらっしゃると思います。そういうところと総合戦略の関係も含めてご意見いただければと思います。

- では数字の感想から。年間婚姻数とか婚活イベント参加者数や年間出生数といったところ。結婚適齢期の人が毎年すごい勢いで減少しているのに、目標数が5年間でどんどん増えるというセッティングは果たして正しいのか。こういう所は悲観的な評価をするのではなくて、むしろ厳しい中でこれだけよく結婚してくれたと評価の方向でアピールするのが正しいのではないのか。婚活の目標もどんどん増えていく目標であげているじゃないですか。対象者が減っているというのに、こうはならないわけで、むしろ婚活は頑張っている、という評価の方が正しいのではないかと思います。出生数もそうです、少しずつ減るという数値目標を下回ったという事ですが、結婚した方は2人目、3人目産んでもらっているということの評価して、外部にアピールするのが正しいのではないのか。

「新規起業家数」高い数値を占めているが、都会から来て喫茶店をやりたい民泊をやりたいとかと言って色んな素敵なお店ができている。それじゃあ、南砺市で育ち南砺市に就職した若者が心機一転やるかと言ったらやらない。やっぱり「よそ者」「若者」をいかに呼び込むかが大事か。起業家が外から来ているのは数字からも明らかなので、そこに重点を置くべきだというのは思っていました。

「クリエイター数」、クリエイタープラザがあって、市外から若者が来てくれていて、結果として永住するのかアパートなのかは別として、こうした方の

人数はあなどれない。目標の増え方は極端で、少しずつ増えていくのが一般的だと思いますので、これも評価できる事だと思います。

伝統工芸などに携わる人が、そんなに減らないで数字を維持しているという事は、若者が何らかの形で高齢者の人数を補ってくれているんだと考えると良い数字ではないかなと思います。

「町内会行事に参加している市民の割合」、アンケートは実態を反映していないのでは、と思う。自治会なり地域づくり協議会にどういう人がどの程度参加しているのか、という調査を直接する方がもっと正確な数字がでるのではと思います。

「コミュニティビジネス」は、我々もこれから頑張らないといけないのですが、市役所からも例えば市道の草刈りだとか、用水の雑木の処理だとか、水道のメーターを見るだとかを、地域づくり協議会に早く出してほしいと要望している。これとこれは希望する協議会に出しますというメニューをだすことで、市も財政の節約に繋がるし、地域の人々の収入にもなる。例えばシルバーに登録しているような人は町部の人で定年になったような人。農村部にはあんまりシルバーに行っている人は少ない。コミュニティビジネスを地域に出すことによって、家にいる高齢者が生き生きと活躍してくれるのではないかな。

「間伐面積」杉の木は里山は荒れています、これを伐採して新たな木を植えて森に戻すという事が南砺市の大きな課題だと思います。この実施率が低いというのは、私もそのような気がします。西部森林組合がほぼ受けているのですが、何町部といった一定の面積が揃わないと、国の補助対象にならなかつたりする。個人が手を挙げていってもどうにもならない。西部森林組合にも人などキャパがあるので、粛々と受けていくのは現実的に無理。今は西部森林組合から「このエリアやりませんか？」ときてやるような状況。まちの姿勢では間伐は増えていかないと思うので、担当者が各集落に入りこんでこれこれこういう制度があつて、と促さないと、個人が手を挙げてできるものではないと思います。本当に南砺の山をきれいにしようと思ったら、担当課が各集落に入り込んで「やりませんか」とまとめて、西部森林組合に手を挙げるというような流れができないと、と思っています。

- 住むにあたって思ったことなのですが、万雑のシステムを知らなかった。説明はされて、例えばこれは皆で草刈りをするために大切なものなんだよ、というようなことを地域に入ってから聞いたのですが、ある移住してきた友だちはまちの3箇所を面したところに家を買ったら、3箇所から万雑を払えと言われたということで、そういったことが透明化されれば良いなと思います。例えばマンションに住む時でも、管理費がいくらかかります、というこ



とが最初に分かっていたらそれで良いので、しっかりしてほしいなど。入る前から理解して払うのと、入ってから急に言われて払うのでは違うなという思いがあります。今は1年目だから、ということで半額にさせていただいていますが、助走期間も必要かなと思いますので、そういうところで分かりやすい何かがあれば良いなと思いました。

○ いつも思っている事を。親は60, 70で、当たり前で周りは二人っ子とか、私は一人っ子ですし、多くて3人という中で育ちましたので、急に3人産めって言われるとちょっと構える世代です。今そんなに仕事も給料も良くないし、2人で働きながら生活していかなければならないので、どんどん子どもを産め、産めや働けやという社会ではありますが、課題が多い世代になってきたなというのは身をもって感じています。その中で地域づくり協議会のような所に私たち世代ももっと入っていかなくてはいけないと思っはいるのですが、公民館の活動や地域の活動というのは、60代70代の親世代が一生懸命やっていて、そこで世代間の温度差も感じつつ、自分たちの意見も反映させなければいけないんだけど、主体がその世代なのでなんとなく入り込めなかったりするという現状がある。私はこのようなタイプなので、ちょこちょこっと知り合いが増えていっているのですが、ここにも若い人がいるのに、ここにも面白い人がいるのに、というのが自分の中には少しずつあるのですが、地元で育った人とか知らない人にこんなことあるんだよ一緒にやらない？という機会が増えたらいいなと思いました。

○ 最後に委員長として、気が付いた点などまとめたいと思います。一つには、南砺に移り住んでみたいという人の何故かということについて、それは南砺が持っている豊かな農景観だと思います。だとすると、農景観をもっているのは農業ですが、後継者がいない。あるいは担い手が何かの制約があってブロックされてしまう。農業が外から来た人にもいかに広げていけるか、もちろんJAとも協議しないといけないが、やっぱり行政が積極的に関わってもらって、色んな干柿だったり新しい事業だったりありますが、半農半Xの半農があるというのが多様な働き方のベースになると思います。是非農地や畑地を外からこられた方に上手に使っていただきながらベースを作っていたかどうか。それが南砺のブランド品を作っていく上でも創意工夫とか色んな目線が必要だと思いますので、是非農業をどういう形でやっていくかということが大事だなと思っております。それと同時に地場産品がきちんと食されていく。南砺に来たらここに行けば地場産品が食べられるよ、というようなマークでもいいですよ、そういうのがもっともっと子ども達の創意工夫でやっ

ていただくと、もっと総合的な魅力を発信することに繋がるかなというのを聞きながら思いました。公共交通の関係で言うと、クリーンスマートモビリティという時速20キロ以内で4人乗りの小さな車を走らせながら、再生可能エネルギーを使ってやっていこうという動きが出来ていまして、今たまたま環境省のお手伝いをしていますけれども補助金等のメニューになっています。地域循環共生圏という意味で防災とあわせてよりフレキシブルな交通手段と防災の時にも使えるのか、そういうことが重要になるのだろうと思っています。それから、これは本当かわかりませんが、南砺の周辺でも空き家が増えている、それを市外の人を買って、再利用せずに材木だけ切り出して持っていくという話もあります。なんとか空き家を地域資源として再活用できるような、地元で暮らしている方と外から来られている人が意見交換、情報交換しながら利活用できるようなことがあれば良いのかなと思います。

先ほど市長の言い訳もあったが、数値目標は元々増田レポートから始まって、国からのありがたい目線で金をあげるから目標作れということがあって、どちらかというと右肩上がりの昭和の数字を出すより受けがいいというところで、無理やり作った所がありますので、数字は数字として、南砺のまちづくりへの効果が上がっているだろうかという視点で見ていただければいいと思う。これから第2次総合計画も作られると思うがその辺は冷静に、実現可能性、一つ一つ着実に底力が上がっているという実感が出来るように数値を考えていただければと思う。

SDGsでは、今関わっている愛媛県西条市で、ここも南砺と同じく移住者が増えている、賑わっているところなのですが、子ども食堂の話が出ています。今6人7人に一人が貧困だという状況において、子ども食堂を如何に維持、運営していくかというのを考えていくと、あれは本当にSDGsで1番の貧困と2番の飢餓と4番の教育と等々の問題と全部関わってくる。そして、それを解決するために全てのパートナーシップが必要という17番目の目標になってくる。つまりSDGsというのは、地域課題を解決することに全部繋がっていくんです。どうやって解決することで、どんなインパクトが生まれてくるのか、それこそがSDGsの指標の使い方なのだろうなと思います。そういう意味で総合計画や総合戦略の中でそれぞれがどういうSDGsの課題と向き合っているのか、どういう風に関連すると解決に結びつくのか、と考えるもらえばいいと思う。SDGsの良い所は世界言語なこと、今の地域の課題がグローバルな課題に繋がっているということで、子ども達にもある意味でわかりやすい形になっていくのかなと思っています。総合計画に向けて、11月に次の回があると思うが、南砺の地域づくりも産めよ増やせよではなく、多様な人達が本当に満足できる、心豊かな美しいまちになっていくことが、都会化しない一流の田

舎なのだろうと、前に民芸でも話をさせてもらいました。色んな人が集って、南砺の一流の田舎を世界に誇るようなことを皆で語り合えるような場を、10月にローカルサミットやりますから、今度は南砺の市民にもう一度自分たちの実感をしてもらう場として考えたいと思います。総合戦略が総合計画に発展して、世代を上手くつないでいくような、多様性ある、底力ある一流の田舎を作っていくステップになってもらうと良いのかなと感じている。